

< 2006年度・テキスト >

植村正久 『真理一斑』(1884年)(『植村正久著作集4』新教出版社)

< 目次 >

第一章 宗教を総説す その一

第二章 宗教を総説す その二

第三章 宗教の真理を講究するに必要な精神を論ず

第四章 神の存在を論ず その一

05年度

第五章 神の存在を論ず その二

第六章 神と人との関係を論じ併せて祈祷の理を説く

第七章 人の霊性無窮なるを論ず

06年度・前期

第八章 イエス・キリストを論ず

第九章 宗教学術の関係を論ず

< 真理一斑の基本性格および構成 >

・キリスト教の弁証

宗教一般からキリスト教へ

・キリスト教的宗教哲学、とくにイギリス系のスタイル

・現代(近代)そして日本(明治日本)という状況において

近代科学、東洋思想

・構成

宗教の概念規定(第一章、第二章)

人間は本質的に宗教的である、宗教は人間の核心的な問題である

信仰対象(神) - 神と人間 - 人間

宗教理解のための方法論(態度・心構え)あるいは認識論(第三章)

神論(自然神学あるいは宗教哲学)(第四章、第五章)

無神論論駁、有神論の擁護

神と人間(創造、摂理、宗教経験・祈祷)(第六章)

人間論(魂、来世)(第七章)

キリスト論(第八章)

文化論(キリスト教と文化)(第九章)

<後期の要点>

第六章 神と人間との関係を論じ併せて祈祷の理を説く

「余は前章において、すでに神の存在を略説したり。本章においては、神と人との関係を論ぜんと欲す。蓋し単に上帝の知りたるのみにては、人心の要求を満足するを得ず。」(108)

「人類の上帝を求め、その存在を究知するの順序を示せるなり。先ず第一に、吾人は天地人生の状況を観察して、その理由を求め、その解説を探らざるを得ず」、「次に良心醒覚して、靈性の渴望を刺激し」、「第三に、親しく上帝と交和し、父子ただならざるの念を提起するは、実に神を獲たるものと言わざるを得ず」、「実験を得たりと思考す」(109)

「一 上帝は実に吾人を去ること遠からず」

「蓋し、上帝は断えず人類の近くに在り。その存在の及ばざる所は、宇宙六合の間にこれ有るべくも思われず」(109)、「上帝は常に我らの傍に在りて、瞬時も離るるものにあらざるなり。ペルシア国の語にいわく、神は汝が己に近きよりも汝に近きものなりと。」(110)

「二 上帝は万物に在りて作用をなす。」「神は特に吾人に近きのみならず、その力は万物に涉り、吾人の身を支持するものなり」、「世界と人類とが依然として存在する得るは、上帝の力断えずこれを支持し、上帝自ら万物のうちに遍きによるなり」、「彼万有の上に位し、万有に貫き、また汝ら衆のうちに在りと」(110)、「キリスト教徒中或いは汎神節の妄謬を忌むの甚だしきより」、「これは要するに、およそ上帝に依りて存在せる万物は、上帝に依りて保続動作すべきこと論ずるまでも無かるべし」(111)

「三 上帝の生民の父なれば、吾人の上帝における実に父子の関係あるものとす」、「神の像に肖りて造られたるものゆえ」、「上帝の至大なる心性は、人類の有限なる心性のうちに反射せられたり」(111)

「人類は上帝の子孫たるがゆえに、その存在を認識し、またその性質を測知し、これに事うるに何らの義務をもってすべきやを知るを得るなり。蓋し人の心性は神を想念してこれを信認するの種子なり」(112)、「神は実に生民の父なり。ゆえに吾人はこれと最も親密なる交誼を結び、渴慕敬愛して、永久服事することを得べし」、「パウロがアテネにおいて、神は我ら各人を隔たること遠からずといえるときに方り、心あるものの靈魂には実にもと応和したるなるべし」(113)、「これら異邦人の歌詩は、思慮深き人の時に、心裡に想起せらるる想念を善く表出せりと言うべし。使徒パウロは、しなわりこの語を引きてアテネ人を啓発せんと試みたるなり。」(114)

祈祷のこと

「蓋し、祈祷は人類の天性に発したるものなり」、「人は祈るところの動物なり」(115)

「その第一の主意は、上帝の徳を慕いてこれを交親し、相思、相愛の情を通ずるに在りとす」、「自修自進の道」、「勉強と成績」、「かくのごとくして養成したる品性は、秀美の最高等なるものにあらず」、「高貴なる品性とは、自遜に基づくものなり。真正の英雄は非常に信ずるところありて、その勢力と気力とを上天より受けたるものとす」(116-117)

「ファラデーの品性においては、謙退、溫柔、和樂のよく剛毅とともに相伴えるを見たり」、

「祈祷は人の心を寧静、純良、勁健ならしむるものなり。またよう困難を軽うし、憂愁を解き誘惑に勝つ力を与え、罪惡に抗するの勢いを得せしむ」、「祈祷は人の品性を模造するにおいて、非常に功あるものなり」(117)

「道徳上に係る事物に就きて祈るときは、それを誠実に求むれば、必ずわが乞うがごとくに応驗あること疑うべからず。しかれども世間生平の事物につきて祈るときには、然らず」、「確乎として信ずきところなれど、果してわが祈れるごとくに應驗あるや否やを知るべからず」、「目下の境遇は、自他真正の利害得喪及び上帝の栄光に対して、いかなる関係を有するか」、「あにわが浅薄、疎漏なる意見に拘泥して、上帝の措置を指揮するを得べけんや」、「ゆれにわが一切の利益を神に委ね、死生命あり」(118)、「いかなる場合においても、わが願うところを天父に訴え、無限の信任をこれに安置し、公直、無私の心をもって順逆の二境に処し、静かに神の祐助を俟つ。これ生平の境遇に関し、常に上帝に祈るところのキリスト教信徒の精神なり」、「人類の分」、「人生の禍福、屈伸は、ことごとく神に手中に在りて、その安排する所に任す」(119)、「順境、逆境の別なく、我はただその境において、上帝を信ず」(120)

第七章 人の靈性無究なるを論ず

「吾人はいかなる精神をもって死を待遇すべきか、これ実に至要の疑題にあらずや」(122)「靈魂の不滅なるや否やという問題」、「蓋し人類が己の無究に存するを信ずるは、その自然に出るものとす」(123)、「冷淡なる唯物論も、固陋なる飲食学も未だかつてこの信仰を全く人間に絶滅すること能わざりしなり」(124)

「人心の運用は大いに制限せらるるところありといえども、その發育は際涯を知らず。ほとんど無限に發達する力を包蔵するもののごとし」、「自ら眼を悠久の世に属し、己れが靈性の無究なるを想念するに至れるなり」、「人心に深く銘せられたる高明正大、合理当然の信仰なり」(124)

「靈性無究なるの証左を提出するに先立ち、身と心との関係及びその殊別のものたるを論弁すべし」、「余は前に彼の唯物論は、天地万物、動植諸類の現象を解説するに足らざるを明示せり」、「万物の首長たる人の心性を解き去らんと欲するも、吾人はその成功に付きてすでに七、八分の疑い無きを得ず」、「第十八世紀の唯物論は至って粗野固陋の形状を呈せり」(125)

「唯物論者の言に曰く」、「心裡の現象は、頭腦のうちに起これる変化より生じ来たるものなり」(126)、「これを頭腦に通じしめたる時と、心性が注思と意志とをもってこれに反動するときとの間に少頃の間隔あるを知る。これに觀れば、二者互いに相相關する所ありといえども、同一にあらざるをことを論ずるを俟たず」、「これをもって心性のぶつちなるを証明するを得べからず。心裡上の現象と生理上の現象と互いに相伴うといえども、これによりて二者同一なりと言わばもつての外の論なるべし。何となれば、常に相伴うものは必ずしも同一な理と言うを得ざればなり」(127)

「吾人もし唯物論を弁倒せんと思わば、人心の全く物質に依らずして運用するを必要とせず。その性質、形状互いに相容れざるを明らかにするときはずなわち事足りぬべし」、「宇宙間に在る有限の靈性ことごとく物質と聯合する所あるも、その判然物質と種類を異にするには毫も差し支えなかるべしと思わる」、「美妙の音楽は楽器に存するにあらず。すな

わち聴者の心に存し、また伶人の心より発するものなればその器にして破るるも、楽はそれと偕に消失せず」(128-129)

「心裡の現象は運動にあらず」、「物質的の運動などをもって心上の事物を説き去らんするは未だ己れの問題なる心の何なるかを察せざるものと言わざるを得ず」(130)

「頭脳は一種の機械にして思想にあらざるなり」、「思想などが運動にあらざるがゆえに思想となりたる勢力は、結局立ち消えの状に陥らざるを得ず」、「もし思想をしてその勢力の生起する所たらしめば、思想の発すると同時に物質の勢力幾分か消失すべきはずなり」(131)

「記憶」記憶と脳中の記銘との間にも同一の隔離天地もただならぬものあるを認む、「かくのごとくなれば誰かこの標章を解釈するものぞ。或いは標章は自らして己れの意味を知ることを得たりや。余輩は断じてその然らざるを知る。蓋しこれを検閲、取捨するの任に当たるものはすなわり心なるべし」(132)、「万一この記銘をもって記憶の由来を解説し得べしとするも、その困難の局は未だ結了するを得べからず。何となれば、そもそもこの記銘なるものは絶えず脳中に存するものなれば、その事の記憶も絶えず意識上に発表すべき理なりとす。しかるに何故に吾人が数年の間忘却し居りたることは、今日に至りて俄然胸臆に現出して意識状の事実となるに至るか」、「こもまた解説を要すべき一疑題なりとす」(133)。

「我なるものはこの千変万化のうちにありて永久不変なること疑うべきにあらず」、「本我の終始同一なる事実と全身の常に転変更化する事実を対照すべし」(133)

「吾人の心もし数個の殊別なる局部より成立するとき、全く思想の作用をなすこと能わわざるに至るべし。何となれば、およそ思想なるものは衆多複雑を致一に帰せしむるを職とす」、「しこうして吾人の識性複雑にして純一ならずんば、何をもってかこの総合を来すべき」(134)、「五官等の呈出せる守株の知識を集め、その交互の關係をして判然たらしめ」、「人心には一般に総括する単独純一の感覺無かるべからず」(135)

「以上論弁せるごとく、心裡の現象は、物質の現象に帰するを得ず。到底心の作用と物質の作用とは氷炭異類のものたること明らかなれば、これをもって同一実体なりとするは、大いなる誤謬なるべし」、「かくのごとく性質の異なるとり、別種の実体を立つるは、もとより學術の法則に適えることなり」(136)

「光熱の至るに会えば、すなわり遍く空間に充塞せる「エーテル」ありと認定す」、「ゆえに吾人が心性の特殊なる現象を究察して、その実体全く物質以外に在るものと認定し、靈界において、その實在を求むるも何の不可かこれあらん」、「議論上の便に供する設理に過ぎずといえども、わが心の物類と異なりて、自主、自由の性質を有し、広狭輕重の別無きは自己の意識においてすこぶる確知するところなればなり」(137)

「なおここにその不都合の極点を示して、この項の局を結ばんと欲す」、「そもそも合理の信認なるものは、わが眼前に種々の憑拠理由を臚列し、わが心内に存する真理を標準に率いて、これを判別、取捨するより起これるものを言うなり。ゆえに自主、自由は理論に欠くべからざるものとす。しかるに彼の唯物説は、この自由を否決し、物質の法則をもってことごとく心裡の事物を解説し去らんと欲す。これ人に理論の力あるを拒む説なり」(139)

「心の現象は物質の作用にあらずして全くこれと殊別なる実体に属す。すなわちこれを名

づけて霊と称す。身と心は決して同一のものにあらざるなり。果してしからばたとい形質に属する体軀死して敗壞するも、靈魂必ずしもこれとともに滅亡すべきの理無し、「身は心の使用する一つの器具たるに過ぎず」、「心の滅するを説くは甚だしき妄見にあらずや」、「靈魂と肉体とはもとより殊別なる二個の実体なるのみならず、時に盛衰消長を同じゅうせることあり」(141)、「心身は素と全く殊別なる二個の実体にして、必ずしも同時に盛衰消長するものにあらざるなり。すでにその盛衰を共にせずんば、その存亡をも辛共にすべからざることを推して知るべきものとす」(143)

「心性の志望を究察するに、未来世存在の拠となすべきものあり。蓋し人生は完備の境にあらず。現実の世界は思想の世界にあらざるなり」(143)、「造化は必ず自家撞着の事を行なわず。その措置や首尾貫徹して、照応符節を合するがごとし」、「心靈の歸趣は、その性質によりて知るべし。その性質を観るに、永生の資力を具う。ゆえに造物者これを造るの目的は、これをして永久に保存せしめんがためなり」、「死は人生の一段落のみ。決して全局を結ぶものにあらず。その佳境は遠く死後に在りとす。これ靈性の無究なるべき一証にあらずや」(144)

「今日はこれ試験の世界にして、殊に人生は安定の地に在らず」(144)、「蓋し公道の必須、良心の疑うを得ざる所なり。天網恢々疎なれども決して漏らすこと無し。天の賞罰はその理由ありて、遅速の差を現わすこともあらん。しかれども、そのついに免るべからざるは論を俟たず」(145)、「烏有に歸するを畏怖、戦慄するの念はいずこよりか来たらん。何故に靈魂は自ら退縮して亡滅を怖るや。これすなわち神性わがうちに在りて啓発すればなり。未来世を支持し、永遠の世を人に教うるものは天なり。ああ永遠の世よ、汝は悦ぶべく、また懼るべき思想なり」(146)、「これを要するに、死をもって吾人が存在の終結なりとするときは、甚だ人の靈性に悖戾し、大いに天然の秩序を紛乱することとなるなり。何となれば、蓋し人の良心は善悪の賞罰を明らかにし、道義の完美を期し、その成長の無限なるを信ずるものなり。しかれども今日の世界においては、その事絶えて成就すべからず」、「死のもって万事に終わるべしという説こそ、容易に思念すべからざることなれ」(147)

「古より天下の人が、渴慕、畏怖せる未来世存在の信仰は、迷謬にあらず。また妄信、惑溺の類にあらざるなり。その実に道理に基づき、人生の有様を解説するに必要なこと明白なるにあらずや」、「しかれどもキリスト教徒は単にこれらの理由のあるのみにて、未来世を信ずるにあらず。もとよりキリストの復活をもって歴史上確として動かすべからざる事実なると思惟するがゆえに、これをわが死後に存在する確証と見做さざるを得ず」、「明白なる一大事実とはなれるなり」(148)

第八章 イエス・キリストを論ず

「イエス・キリスト一生の行実は、吾人の最も感嘆、驚異の念を懐きて止む能わざるところなり。吾人キリストの人倫に超越せる性行の由来」、「汝らキリストを誰となすかと言える問は、すでにその在世の時に沸騰せる議論なりしかど、爾来二千年を経て、今日に至り、なおこれを議するものの間断あるを見ず」(149)

第一 キリストの過誤罪惡無きを弁じ、その聖徳實に至れるを明らかにす

「独りキリストは純正の徳を顕わし、罪惡と認むべき事を行なわず」、「その錯誤の憂いなき公義直のかたわらには、不義の並立すべき余地を遺さず」(150)、「キリストは自ら無罪なるを信じて疑わず」、「キリストの事は左の二者の外に出でず。キリストは真に純全なる聖徳を具有せるか、否らば殊に偽善を粧飾して、世を瞞着せんとしたる奸人ならざるべからず。後の説のごときは少しく思慮あるものの決して取らざるところならん」(151)「偽善者いかでかよくこの高明正大の徳あるを得ん」、「いやしくも心を虚にし、公平の眼をもって新約の教えを見ると、その道義完備せりと言わざるを得ず」(152)、「宗教がこの人をもって人類の理想、模範となしたるは選ぶ所を錯らざるものと言うべし」、「非キリスト教徒といえども、これに反対するを得ざるなりと」(153)

第二 キリストの聖徳は、完全美備、普く万世万国に通じて、吾人の標章模楷となすべきものなるを論ず

「時勢の風潮に制せられ、風土、習慣の区域を脱却すること能わざるをもって種々の弊を受け」(154)、「しかれどもキリストは世の賢哲、聖人と異なりて、衆美を兼ね備え、世代邦土の区域の制せられず、その思想、行為は天下を通じて模範となすに足れり」、「人の子の言行を観察するに、毫もユダヤ人の臭味を帯びず」、「万世の師表となれるものなり」(155)

第三 キリストの品性は衆美を兼ね、衆徳を適度に具有して、過不及の跡を見るべからず「人情は一偏に局し易く、ことごとく衆の美德を具えて過不及の弊無きものは、蓋し一人もこれあるべからざるなり」、「しかるにキリスト一生の事蹟を見るに、少しも偏僻の弊に陥るところ無く、仲尼のやや近づけるところの衆美兼ね備わり、衆善相和するの域に達して遺憾とすべきところあるを見る」(156)、「キリストに在りては、最も美しき調和を呈し、その光耀互いに相映じて、一層の美観を現出さる。これキリストの性質を論ずる者の古来最も注目して感嘆に堪えざるところなりとす」(157)

第四 キリストの常に自ら覚知し居りたることは、最も驚くべき事実なり

「己れの身に疑惑を懐きしこと無く」、「キリストの言説は常に是という一字をもって貫けり」(158)、「この人いかにしてよくかかる真理を確信することを得たりや」(159)

第五 イエス・キリストは許多の酸苦に遭いて、ついに十字架に釘せられたるを論ず

「盤根錯節の危に逢うも、なお且つ平生の志を失わず、その徳義のますます馨しきものは甚だ少なしとす」(159)、「しかれども今キリストの言行を観察するに、苦楽によりてその心操を忒にせず、災厄並び至るに従にいて、その栄光いよいよ炳焉たるを見るべし」(160)、「キリストは感覚の痴鈍なる人にあらず」(161)、「キリストは神に相応しく苦を受け、また死に就きたるなりと言わざるを得ず」、「これ最も謹むべき最も厳かなる場合において、己れの神なるを明言したるものにあらずや」(163)

「すなわち己れを欺くの愚人か、もしくは人を欺き、世を瞞着するの悪人たらざるべからず」、「しからばキリストは実に神か、はた天地の容れざる悪人か」、「読者は二者のいずれかの点に己れの論拠を取らんとするや。イエスをもって真正の君子万世の儀表なりなど

と明言しつつ、なおこれが神なるを認めざるものは論理上の罪人なり」、「キリストの神たること明らかなり」(164)

「天下の人ことごとく一つの理想を慕いまた一つのキリストを設けざるは無し。偶像を拝し、或いは特殊なる思想に心酔してこれを楽しみ慕いて、一生を送るがごときは皆キリストを求むるより起これり」、「人類は純霊、絶対の上帝を想念することも、またこれを受することも甚だ難しと做せるがゆえに、その弊やついに偶像を作り、菩薩を齎するに至れるなり。君子は悪んぞその美を知る。吾人は彼の偶像教のうちにも、キリスト降世を預期するものあるを見るべし」(165)、「ここにもキリストかしこにもキリストと言うものあるは、キリストの需求実に人性の需求なるを知るべし。しかれども人性の需求は必ず応驗を有するものなり」、「キリストを求むるの念は自然に備わり排除するを得ず」、「キリストは万国民の渴望するところなり」(166)

「正当なる進化説は、キリスト教の友侶なり」、「蓋し真理は必ず致を一にするものなれば、明白なる真理の互いに反対すべきはつな無し」(167)、「進歩の順序は常に特選の一個人より始めるものなり」、「宇宙の傾向は、或る最も特殊にして善尽くして、美尽くしたる形状を出すに在りと断定せざるべからず」(168)、「万物は皆キリストを待ちて、その出現の預言をなせりと言わざるを得ず。キリストは万物の依って立つところ天地の帰向する所、人世の歴史ついにキリストの一身をもって集中となす、万物皆その国の隆盛を翼賛し、古今人の経営する所、ことごとくその榮に帰せんとす。その聖名は世々無究に崇められるべきものなり。アーメン」(169)

第九章 宗教学術の関係を論ず

「今やキリスト教のわが国に行なわれんとするにあたり、世の哲学、或いは浅薄なる見解を立て、キリスト教は学術とすこぶる反対せるもののごとく思惟し、知識いよいよ開くれれば、宗教漸くにしてその跡を滅すと妄想するもの少なからずと聞けり」(169-170)、「ドレーパー」

第一 教法家が学術の進歩に反対せる歴史上の事實は、論者の揚言するごときのものにあらざるを論ず

「ニュートンが、その原理篇の末に述べたる言に曰く」、「宇宙の主として、これを統御するなり」、「天学者、宇宙和合論を著述し、筆を措くにあたり」(172)、「彼らが奉教心の感慨は、智力の発明と両立合和したるなり。真正の学術宗教何ぞ相反するものと言うべけんや」、「学術上の新発明は常に教会の反対する所なりきと言うものあれど、これ最も大いなる誤解なりとす」、「少数の例」、「カトリック教会は、思想の自由と矛盾せる主義を持して、十九世紀の文明を攻撃するもののごとし。前法皇ピウス第九世が、一千八百六十四年に公布せる異端八十箇条の禁令のこと」(173)

「キリスト教とキリスト教会とは実に殊別なるものなればなり。教会の非挙を摘示して、その道を難ぜんと欲するは、あたかも東京の学士会院の失策を挙げて、学問を非難するに異ならず」、「蓋し天主教はもとよりキリスト教の正統を嗣ぐげのものにあらず。半途にして、妄信の岐路に迷い入りたるもんびゆえ、かかる誤謬に陥りたることあるなり」(174)「殊にローマ帝国衰頹の勢い猛烈にして、百般の文物、消滅の恐れあるにあたり、よくこ

れに抵抗して、ついに学問の復興を来たし、宗教の改革を成就せるものは、迷妄に陥りたる教会のうちに遺存せるキリスト教なり。ギゾー曰く、教会はローマと北狄の世界との間を聯結せる一大連環にして、これが文明の起本なりき」、「キリスト教この際に出でて天下を改造するの任を負い、非常の力をもって夷俗を教化し、その偶像を毀たしめ、制度を設け、法律の尊貴威厳を恢復し、一旦渾沌たる形状に陥りたる中より、更に純粹高貴なる文明を生せり」、「教法改革及び維新文明の基礎を固うせるを知らん」(175)

「「ピューリタン」の教徒が英国に現われて、一千六百四十九年および一千六百八十九年の大革命を行ない、英国及びアメリカ聯邦の自由制度の基礎を設けたるは、実にワットもしくはアーカイトの生まれざる時に在りしを心に銘ぜずんばならず」(176)

「昔時ローマ、ギリシア等の哲学士は、役奴の非なるを知らず。また工作の尊さを覚えざりしなり。アリストテレス」、「キケロ」、「キリスト教は直接にこの誤見に反対し、大いにこれを改むるの感化を普及せり。キリスト自ら僕の状に来たり、もってローマ、ギリシアの文明に反して、使役労働を愧とせざるの精神を發揮せり」(177)、「クリソストム曰く、奴隷を殘害するの罪は咎めなしと思ふなかれ」、「吾人は工作労働を恥とすることあるべからず」(178)

「學術の発見は神学者よりはむしろ物理学家のうちより抵抗を蒙りしこと多しとす」(178)、「ヒューエル曰く、英国において、コペルニクスの説漸く勢力を得るに至りしは、有名なる教正ウィルキンスの力によれり。またニュートンの引力説は、いかなる運命に遭いしや問うに、十七世紀および十八世紀の初つ方に、天下に名を得たる学者、哲学士は、ホイヘンス、ベルヌリ、クザン、ライプニツおよびデカルト派の学士を始めとして大抵この説を非難せり」(179)

「教会が昔學術と抗争したることあるは事實なれど、論者の言いはやすほどにはあらず。たとえかくのごときこともあるも、これ教会の罪にして、キリスト教の責に帰すべきものにあらざるなり」(180)

「そもそも學術も宗教も同じく人性に根柢せるものにして、各々固有正当の領分を治めるものなり」(181)、「近時ダーウィンの唱え出せる進化説は、未だ學術上確實なる事實にあらずといえども、極めて信然なる設理に近しとす。しこうしてその意義を正当に解釈すれば、毫も有神論及びキリスト教の組織と相背けるものにあらず」、「しかるに学者或いは進化説をもって宗教を駁するの料に充て、これによりて無神説を唱えんとするものあり。ヘッケル、フォークトの如きこれなり。進化説は夙に彼らの妄用するところとなりしがゆえに、事情に疎き或る教家は知らず識らず無神説と進化説とを同視するに至れり」(181)

「本色」、「己れの区分」、「思うに死間接をしてその正当の伴侶たらざる無神説及び唯物論と初めより分離せしめれば、その進歩今日よりも迅速なりしことならん」、「蓋し、學術は或る學術家とは全く同一のものにあざれば、論者望むらくは無神説及び唯物論と學術を混同せしむるなかれ」(182)

第二 古より學術上の発見と聖經の所説とすこぶる反対すると見えたることもありたれば、學術いよいよ開け、聖經の解詁漸く進歩するに従い矛盾するところ次第に消え行きて、一致合和の形状を呈するに至れり。

「地質学」(182)、「しかれども、地質学の未だ開けざる前にあたり、紀元後三百五十四

年の昔に、系統神学の鼻祖アウグスティヌスの曰く、未だ太陽の無かりし頃のこれらの一日は、何らの義を徴するや。そのいわゆる昼夜なるものは、未だ成就せざる万有とすでに成就せる万有との区別にあらずや」(183)

「彼の進化説のごときも強ちに聖經の趣旨と異なるものにあらず。アウグスティヌスの言に曰く、神は物質に力を賦与し、これをして或る境遇において、發育せしめ、もって有機の体形を生じたるなり」、「神が万物を造れるとき、宇宙はすべてのものを含蓄したるならん」、「吾人が神が数多の順序を踏みて、万物を造成せりと言える進化説も、敢えて聖經に戻ることに無く、また有神論に背戻するところなきを知る」(184)

第三 宗教と学術とは互いに相反せざるのみならず、すこぶる緻密なる関係を有するものなり。

「学術と言ひ哲学と言ひ、或いは宗教神学と言ふも同一なる人智の管領するところ互いに相須って進行すべきものとす。学術のごときは宇宙の現象を觀察し、類を分かち法を立てて、現象の次第を明らかにするものなれど、哲学の境界に属する第一原理に倚らざるを得ず」、「蓋し哲学の原理は的確なる事実適用せらるる場合においてのみ、吾人の知識を進歩さしむるを得るなり」(185)、「吾人は経験学、哲学の純乎たる交和により、益するところ多からんとすと」、「人智の三大区域は互いに交渉するところあるものとす」、「加うるに学術も哲学もこれを尋繹して、次第に至極の地に至れば、究竟神学宗教の部内に進入せざるを得ず」、「学問の道は現象を見聞、類別するに安んぜず。ついに天地の由来を極め、無限のものを考察せんと欲するものなり」、「施行、元因を講ずるは、学術の要旨なれば、コントの所説にもかかわらず、学問の極終に神学に入らざるを得ること明かなり」(186)

「キリスト教徒の科学に熱心なるもの挙げて数うべからず」(187)

「ああ学問宗教は二途に分かれたれど、実際に二途にあらず。究竟すれば一に歸す。世の学者が学術をもって宗教を駁撃する所以のものは、未だ二者の真味を悟らざるものにあやらずや」、「ベーコンいわく、神よ汝の受造物はわが書なりき。しかれども汝の聖書は我最もこれを重んず」、「何となれば、人心が単に散在せる第二原因に目を注ぐときは、それに安んじて更に進むこと無かるべきも、諸々の原因聯絡して、相ともにその目的を達するを見れば、ついに造化の摂理及び上帝の許に上らざるを得ずと」(188)

<まとめ>

1. キリスト教神学・信仰への導入

キリスト教弁証学・宗教哲学

伝統的な自然神学の議論をふまえた内容、イギリスの宗教哲学の伝統スタイル

イギリスを中心にキリスト教思想また哲学宗教思想への広範な言及

2. 日本の状況への配慮 + 読み手の問題

中国関係の文献への多くの言及がなされ、引用が行われる

3. 近代世界・近代化という文脈への意識

自然科学への詳細な言及

「宗教と科学」の関係についてのまとまった議論